

故馬場力先生を偲んで

川 瀬 勝 也

(中学校教諭)

現職の教職員の他界は誠に残念である。

特に馬場 力先生の場合は、病が重いと知らされてはいたが、五十一歳と若いので、一縷の望みをもっていただけに、突然の訃報に、教職員は天を仰ぎ、またうなだれ、涙し、深い悲しみにおおわれた。生徒たちは、最後に担任された現高一の学年を中心に、先生を知る者達は号泣し、その日は授業にならなかつたと聞く。

六月七日の仮通夜に駆けつけた生徒たちは夜遅くまでその場を去ろうとしなかつたし、翌八日の通夜、九日の告別式には、文字通り全国各地から卒業生や保護者、学校関係者が駆けつけた。中学校の教職員全員で運営に当たったが、本願寺北山別院に詰めかける人々は引きも切らず、連日千三百人を越えた。

七月十四日には、本校礼拝堂で追悼式が厳かに営まれた。

同志社中学校は宝をなくした。

そういう思いがする。

学校組織は、多くの教職員から構成されているから、一個の存在が欠けたからといって全体にそれほど支障が生じるものではない。また、そうでなくてはならないだろう。しか

し、馬場先生の場合は、少しようすが異なる。

彼は教科はもちろん担任や校務部員として、またクラブ顧問として非常に熱心であったがそういう人は他にも多い。また、リーダーとしての資質は、教頭や校長代理としてその事務能力も含め実証済みであるが、彼以外にも今後そういう人は育ち得ると思う。

単組や同志社連合の組合役員を何度も経験されたし、私立中高の評議員など外部の仕事も多かったが、それらについては跡を継いで活躍している方々がすでにおられる。

なにかまねできないか。

風貌や声や語り口やしぐさやそういったものが天性のものとして、馬場 力その人をつくっていて、それらが実に心地よかった。それは希にみる資質であった。

これほどに人にさわやかさ、暖かさを感じさせる人を私は他に知らない。

「こういう先生がおられるとは、さすが同志社ですね。」という保護者の声を二十五年間聞いてきたし、それが同じ教科の私の誇りでもあった。

私学はこれからますます難しい局面を迎えるが、学校はなによりも人材である。情熱と



●馬場 力氏略歴●

1943年1月11日 東京都青梅市今井に生まれる

1967年 東京学芸大学教育学部産業技術科卒業

1967年4月～1994年6月

死亡退職されるまで27年間 同志社中学校教諭
として勤務。1987年4月には同校教頭を兼任。

ともに上品で明るいそして思いやりのある彼のような人物こそがリーダーとして求められていた。誠に残念でならない。

同志社中学校は、大きな宝を失った。改めてそれを実感する。

馬場先生は大学時代から人気者でした。真面目で一徹な性格は服装にも現れていて、ジーンズやジャケット姿の学生達の中にあつてただ一人学生服の詰め襟姿でとても印象的でした。細身でハンサムというだけでなく、工学専攻でありながら、知歌にも親しみ、歌集を出版するほどでしたから、とりわけ女学生には大変評判でした。若き日のりりしい姿を思い出します。教科においては大先輩の仲原先生のを引き継ぎ、私学における技術教育のために、教材研究はもとより、技術教育研究会の一員として全国の技術教育のために努力を惜しまれない先生でした。

アメリカやヨーロッパ並に中学生段階での技術教育を大切にしている私学が京都にある。全国の技術教育関係者の間で、同志社中学校は大変有名になりました。当時、岩手を中心とする北方教育など、地域での実践が注ぎ込まれることはあっても固有の学校が注

目されることはまれであつたからです。

丁寧で思いやりのある板書やわかりやすい文書作りそして記録することの大切さや会議の運営についてなど、職場においてつぎつぎに雛形を作り上げたのも先生です。とりわけ、どのような生徒も決して見捨てることなく親身になって世話をし続けた姿は、教師の手本として、今後も語り継がれていくことと思ひます。

こんなに早く病状が進行するとは、先生のその優しさが悔しく、その丁寧さを恨む思いです。野球部員に豪快にノックする姿や毎号「野球部通信」を書き続ける姿を鮮やかに思い出します。そして一時退院されたときにも、失われた体力でありながら野球部やラグビー部の試合に駆けつけました。白球を追う生徒達に最後の夢を託し、また、先生はおそらくそのとき走馬燈のように、ご自分の青春譜をだぶらせていたに違いありません。

本当に大きな存在でした。

これから先、馬場先生の遺志をみんな大切にしていく決意です。
馬場先生やすらかに。